

〔報 告〕

緩和ケア実習における学生の学びに関する研究

A study of learning of nursing students in palliative care clinical practice

名倉 真砂美 森 京子 竹本 三重子

【キーワード】 緩和ケア実習、看護学生、学習

I. はじめに

2007年の「がん対策基本法」¹⁾施行、「がん対策推進基本計画」²⁾策定により、緩和ケアでの看護の役割の重要性がますます高まり、看護職者はがん患者および家族の苦痛の軽減と療養生活維持・向上へのかかわりが求められている。だが終末期患者の看護場面は、緊張を伴う要素が多く、看護職者の負担は増大している。このような状況のなかで、緩和ケアを必要とする患者および家族に向き合えるように、看護基礎教育での緩和ケア教育の充実が望まれている。

緩和ケア実習で学生は、「充実した実習だった」、「看護の考え方が変わった」などの感想を述べていた。学生が緩和ケア実習でどのような学びをしているのかを明らかにすることで、緩和ケアへの教育的示唆が得られるのではないかと考えた。

ホスピス・緩和ケア実習での学生の学びについて、見学実習の実習記録から学びについて分析したもの³⁾、学びと学びの場面についての研究⁴⁾、学びがどのように生成したかについての研究⁵⁾などがあり、学生はホスピス・緩和ケア病棟の特殊性を理解することで、学びを深めていることが明らかになっている。そこで緩和ケアがさまざまなところで提供される必要があることから、学生が緩和ケアの視点を持つことが看護の学びに有用かを捉えなおすことが必要ではないかと考えた。そこで本研究の目的を、緩和ケア実習で学生がとらえた学びとはどのようなことであるかを明らかにすることとした。

本研究は、看護基礎教育における緩和ケア教育の方向性を示唆し、緩和ケアの人材育成教育に関する資料となると考える。

II. 本研究における緩和ケア実習について

本学の緩和ケア実習の目的は、緩和ケアを支えるチームの一員としてケアに参加し、ターミナル期あるいは慢性期にある人およびその家族を全人的に理解し、その人にとってよりよい生活ができるような支援を考え、看護実践能力を養うことである。

緩和ケア実習は領域別看護学実習（いわゆる各論実習）の8領域のひとつで、1週間1単位の实習となっている。実習場所は、一般病棟およびホスピス・緩和ケア病棟であり、学生は緩和ケアを必要とする1名の患者を受け持って看護過程を展開し、看護を実践する。実習終了後には看護過程の実習記録のほかに、「私の死生観と看護観」のレポートを提出する。

III. 方法

1. 研究参加者

研究参加者は3年次の領域別看護学実習をすべて修了した学生である。

2. 研究方法

1) データ収集

データ収集はグループインタビュー法を用いて行った。研究参加者の学生が5~6名集まるごとに、1回90分程度のグループインタビューを行った。インタビューの内容は「緩和ケア実習でどのようなことを学んだか」を中心に、「緩和ケア実習で印象に残っていること」、「緩和ケア実習を行った感想」など、学生に自由に語ってもらった。研究者らは司会者・記録者として、グループインタビューが円滑に進むように配慮した。

グループインタビューの内容は承諾を得て録音を行い、逐語録を作成し分析の対象とした。実習中の実習記録とレポートは学生の実習状況を知るための参考として使用した。

2) データ分析

グループインタビューの逐語録を繰り返し読み、学生の学びに関連する部分を抽出し、文脈ごとに学びの内容を表す小テーマをつけた。さらに類似性によって分類し、小テーマの意味の抽象度を上げたテーマをつけた。

分析結果は、インタビュー逐語録とともに緩和ケア研究・教育の専門家集団に提示し、検討を繰り返し信憑性・妥当性の確保に努めた。

IV. 倫理的配慮

研究参加者に研究の趣旨を、文書と口頭で説明を行い研究参加の同意を得た。研究参加は本人の自由意思であり、研究参加者の拒否権、中途辞退の権利を保障する。個人情報の保護に関しては配慮を十分にいき、データの取り扱いについては、個人識別情報の削除・匿名化を行う。得られたデータは研究以外の目的で使用されることはないこと、研究成果の公表においても匿名性を確保すること、研究終了後には音声データは消去処分、その他記録類は裁断処分を行い、個人情報保護法に準拠して対処することを説明する。以上のことを説明し承諾が得られた場合に研究参加者とした。

また、グループインタビューであることから、この場で知り得た情報は相互に個人情報を守秘することに

ついて、各自から誓約書への署名を得た。

本研究は研究者が所属する大学の倫理審査会の承認を得て行った。

V. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加に同意が得られた学生は28名であった。

学生は、さまざまな病期にある緩和ケアを必要とする患者を受け持っていた。学生が受け持った患者は、40歳代1名、50歳代3名、60歳代7名、70歳代6名、80歳代11名、90歳代2名で、主な疾患は、大腸がん、直腸がん、食道がん等であった。実習時間内に看取りの場面を経験した学生はいなかった。

2. 緩和ケア実習における学生の学びの内容

緩和ケア実習での学生の学びから、【患者の状態や気持ちは不安定であり、見た目どおりではない】、【患者の言葉の意味とその重みを理解する】、【患者の残された貴重な時間に一緒にいることで患者のことがわかる】、【患者と時間を共有し、患者の希望を思い一緒に援助を考える】、【家族への援助が患者の援助につながる】、【学生としての存在が患者の人生に影響を与える】、【緩和ケアという意識をもって実習にのぞむ】、【吟味しなかったことを振り返って考えることで自覚する】の8つのテーマが抽出された（表1）。

表1 テーマと主なデータ

テ ィ マ	小 テ ー マ	主 な デ ー タ
患者の状態や気持ちは不安定であり、見た目どおりではない	患者の状態とカルテの記載にギャップを感じ、患者を理解することは難しい	・病気の程度としては、一番重たい状態だったが、実際にお会いしてみると見た目は元気そうで、病気とのギャップをすごく感じて、難しくなって。
	患者の気持ちや症状の変化は予想以上に不安定である	・死の受け入れ段階のここにあるとかいうんじゃないくて、いろんな刺激によって感情がコロコロ変わる。 ・ターミナルの人は予測以上に、疲労感がこんなにすごいのかっていうのは実感した。
	診断ラベルではあらわせない患者の気持ちがある	・問題ではあげられない、気持ちの問題もあって、診断ラベルがつけられなかった。
患者の言葉の意味とその重みを理解する	患者の言葉の裏にある患者の思いをわかる	・その言葉の裏には何かあるんだなっていうふうを感じ取ることができて、そういうのをわかりたいなって思うようになった。 ・患者さんの言ってる言葉とか表情とかが、すごくこう痛みを訴えてるとか、本当はこう言いたいんだっていうようなことがよく考えられるようになった。
患者の言葉の意味とその重みを理解する	死を意識している患者の言葉には重みがある	・もうすぐ自分は死んでしまうっていう人が話すことって、すごい重みがあるって感じる。 ・笑顔でいつもいて頑張らなければとっていたので、自分のこれからを受けとめるという気持ちがすごくあるということは感じて、本当につらいだろうなと思った。

テーマ	小テーマ	主なデータ
患者の残された貴重な時間に一緒にいることで患者のことがわかる	患者のそばにいて一緒に時間を過ごすことで患者の思いが見えてくる	<ul style="list-style-type: none"> 寝ていると思った患者さんが、起きたときにだれもいなかったら寂しいと思って、ずっといたら突然話し出したりとか。そういう時に、「ああ、なんか一緒にいて良かったなあ」とか思った。 一緒にいることで患者さんが何を思っているかとかがわかったし、そのことで自分が何をすべきかとかもわかってくる。そうやってどんどんかかわっていくうちに患者さんのために何かしてあげたいと思った。
	かかわらせてもらっている時間は患者の貴重な時間である	<ul style="list-style-type: none"> 患者さんの残された時間、それだけの時間をかかわらせてもらって、もっと自分が頑張ればよかったかと思った。 状態がよくない方が多いので、その貴重な時間に介入するわけだから、その人のために何ができるのかとか、その人によりよいケアをするためには何が必要なのかということはずごく考えるようになった
患者と時間を共有し、患者の希望を思い一緒に援助を考える	患者と時間を共有し、一緒に考えることで患者に受け入れられる	<ul style="list-style-type: none"> どうしたらお腹が痛くない体位で眠れるかとかいうことを患者さんと一緒に工夫をした。 何かしようと思って行ったんじゃなくて、「時間とか共有して、何かしゃべったり、歌ったりしとけばいいか」みたいな、そういう気分で行くと患者さんも受け入れてくれる感じがする
	自分におきかえて考えることで、患者の反応が変わり援助が見えてくる	<ul style="list-style-type: none"> 何をしたいかわからなくて、その患者さんの状況考えて、自分が痛いときはどうしとってほしいかとかで考えると、(援助が)見えてくる。 「わたしだったら、どうかけてほしいかな」というのを、考えて気持ちを楽にして患者さんに接すると、患者さんの反応が変わってくる。
	患者の希望をかなえることを目標として援助を行う	<ul style="list-style-type: none"> 患者さんが「家に帰れるな」と言ったら、指導者さんに伝えたら、その時点でご家族の方に電話して「今が退院できるチャンスです」と言ってみようって早連絡をしてすごいなって。 退院についてすごい希望を持たれているのを聞いて、やっぱその退院するに向けて、どうしたらよいかという援助につながった。
家族への援助が患者の援助につながる	家族が患者への援助をすることで家族の援助にもなる	<ul style="list-style-type: none"> 家族の方でもできる簡単なケアをしてもらって、自分達にもできることがあると喜んでくれた。
	患者の希望をかなえることは家族の援助につながっている	<ul style="list-style-type: none"> 本人さんと奥さんの車いすに乗りたいたいという思いがあって、みんなで車いすに移動してもらったら、奥さんも患者さんも感動して泣いていた。 (できなかったことが)ひとつできると、家族のみんなもすごく明るくなって。
学生としての存在が患者の人生に影響を与える	学生として一生懸命に聴くことで、患者が人生を振り返る手助けになる	<ul style="list-style-type: none"> いっぱい話してくれるし、それを一生懸命聴くことでうれしそうになったり。自分の人生はどうだったかを振り返ることも助けられると思った。 聞いてみてどういう反応を示すかということとはわかるということがあって、何かしら反応が返ってくるということがわかった。
	死に対する自分の迷いやとまどいなど、自分自身の言動が患者に影響を与える	<ul style="list-style-type: none"> 自分の死が近づいているっていうのをわかっているから、そういうのを含めてどういうふうに接したらいいのかを考えないとと思った。 限られた時間の中で、自分ももし取り返せないことをしてしまったらどうしようっていう気持ちがすごくあって看護って怖いなって思った。
	自分の存在を必要としてくれていることを感じる	<ul style="list-style-type: none"> 帰るときに離してくれなくなったり、言葉じゃないけど、そういう部分で必要としてくれるっていうか、そういうようなのが感じられた。
緩和ケアという意識をもって実習にのぞむ	実習の目的を明確にしておかかかわらないと信頼関係が築けない	<ul style="list-style-type: none"> ただ見に行っているだけでは傍観者じゃないと言われて、自分が何をしに来ているのかということをおの方にわかってもらえていなかったのかなというのがあった。 自分の立場というものを理解していただかないと、信頼関係を築けないし、自分が何か意図を持って、それを患者さんに伝えていかないといけないのだというふうに思った。
	緩和ケア実習の意識を持ち、看護者としてかかわる	<ul style="list-style-type: none"> (緩和ケアの)意識をちゃんと勉強してからかかわってないと、ほんとに何をしたいのかが分からないなって思った。
吟味しなかったことを振り返って考えることで自覚する	実習中にはわからなかったことをみんなの話聞いて振り返ることでわかる	<ul style="list-style-type: none"> そのとき(実習中)にはわからなかったけど、みんなの話を聞いて、話を聞く姿勢とか話し方とか、何か無意識のうちにできていたのかなということも思った。
	吟味せずに流れてしまっていたことが自覚できる	<ul style="list-style-type: none"> 多分記録にはあったと思うが、それを吟味することがなかったからそのまま流れてきてしまった。今こういう場でみんなの話を聞いたりして自分の中に自覚した。

1) 【患者の状態や気持ちは不安定であり、見た目どおりではない】

学生は、カルテに記載されている病期と自分の目で見えた患者の状態から、＜患者の状態とカルテの記載に

ギャップを感じ、患者を理解することは難しい＞ことを学んでいた。さらに実際の患者とのかかわりから病状が安定していると見えていても、僅かな出来事で患者の状態が変わることを感じとり、＜患者の気持ちや

症状の変化は予想以上に不安定である>ことや<診断ラベルではあわせない患者の気持ちがある>と学んでいた。

2) 【患者の言葉の意味とその重みを理解する】

学生は、死を間近に感じている患者の言葉を聴き、思いを受け止めようとする<死を意識している患者の言葉には重みがある>と学んでいた。患者とのかかわりを深めていくにつれて、患者が本当に望んでいることは何であるかを考え、<患者の言葉の裏にある患者の思いをわかる>ようになると学んでいた。

3) 【患者の残された貴重な時間と一緒にいることで患者のことがわかる】

学生は、患者との時間を<かかわらせてもらっている時間は、患者の残された貴重な時間である>と意識し、患者への援助を考えようとしていた。さまざまなきっかけから、患者の傍に居ることを選んだ学生は、患者と同じ時間を過ごすことで患者の思いに触れ、<患者のそばにいて一緒に時間を過ごすことで患者の思いが見えてくる>と学んでいた。

4) 【患者と時間を共有し、患者の希望を思い一緒に援助を考える】

学生は、患者の限られた時間を意識しながら患者と過ごし、患者に受け入れられるという実感から、<患者と時間を共有し、一緒に考えることで患者に受け入れられる>と学んでいた。その関係から、患者への援助を考える視点を見つけ、<自分におきかえて考えたことを援助すると、患者の反応が変わる>、<患者の希望をかなえることを目標として援助を行う>と学んでいた。

5) 【家族への援助が患者の援助につながる】

学生は、患者および家族とのかかわりから、家族が患者にできる援助を伝え、家族にも援助に加わってもらうことが、<家族が患者への援助をすることで家族の援助にもなる>と学んでいた。患者の希望をかなえることが、家族の喜びでもあると感じ、<患者の希望をかなえることは家族の援助につながっている>と学んでいた。

6) 【学生としての存在が患者の人生に影響を与える】

学生は、主観的な気持ちから<死に対する自分の迷いやとまどいなど、自分自身の言動が患者に影響を与える>のではないかと、患者とのかかわりにとまどい

や恐れを感じていたと語っていた。だが実際に患者とのかかわりながら貴重な時間を共有しようとする学生自身の姿勢によって、<学生として一生懸命に聴くことで、患者が人生を振り返る手助けになる>と学んでいた。さらにそのような姿勢でかかわった患者から、<自分の存在を必要としてくれていると感じる>ことができたと学んでいた。

7) 【緩和ケアという意識をもって実習にのぞむ】

学生は、辛い状態の患者に受け入れてもらうには、自分が何をしに来ているのか<実習の目的を明確にしてかかわらないと信頼関係が築けない>と学び、緩和ケアについて事前に学習を行い<緩和ケア実習の意識を持ち、看護師としてかかわる>ことが、緩和ケアが必要な状態にある患者にかかわるときの重要な姿勢であると学んでいた。

8) 【吟味しなかったことを振り返って考えることで自覚する】

学生は今回のグループインタビューをきっかけに緩和ケア実習を振り返ることで、<実習中にはわからなかったことをみんなの話を聞いて振り返ることで気付く>ことを学んでいた。また実習記録には記録しているが、実習時にはじっくり考えていなかった内容について、<吟味せずに流れてしまっていたことが自覚できる>とそのときの様子を振り返ることで新たな学びとしていた。

VI. 考 察

1. 緩和ケアを必要とする患者とのかかわりからの学生の学び

学生は緩和ケア実習で、実習当初は死を意識する患者とのかかわることに、「自分自身の言動が患者に影響を与える」と、とまどいや怖さを感じていた。しかし、患者とのかかわっていくなかで、緩和ケアを必要とする患者の特徴である「患者の残された時間にかかわらせてもらっている」ことを意識し、患者に向き合う姿勢が生まれていた。【学生としての存在が患者の人生に影響を与える】というテーマは、患者の残された時間から患者の生命を意識することで、学生の患者への向き合い方が変わり、患者に受け入れられることを自覚することでの学びを示していた。つまり学生が、【緩和ケアという意識をもって実習にのぞむ】ことが必要であると考えていることが明らかになった。

受持ち患者の看取りを経験した学生の感情には、「辛い」、「悲しい」などのマイナスの感情があり、その感情は1ヶ月以上続くと報告されている⁶⁾。また、終末期患者を受け持つ学生には、何を患者にしてあげたらよいかわからないという「身体的ケアに関するストレス」や、会話をどのようにすればよいかわからないという「コミュニケーションに関するストレス」などがあると報告されている⁷⁾。本研究でも学生は受け持ち当初、【患者の状態や気持ちは不安定であり、見た目どおりではない】と、患者の状態をとらえ、かかわることにとまどいや怖さを感じていた。しかし、『患者の残された時間』に気付いたとき、学生の姿勢は変化し、とまどいや怖さを乗り越え『患者と時間を共有する』ことを行っていた。これは学生が自己を中心として考えていたことから、患者のためにと気付き、自己から他者へと視点を転換させたことを意味する。こうして患者へと近づくことで、患者から受け入れられることを実感し、患者の視点で看護を行なうことの大切さを身をもって学んでいたことが考えられる。

患者の視点に立てるようになり、患者へと近づいた学生は、患者とともに時間を過ごし、援助について一緒に考えることができるようになっていった。【患者の言葉の意味とその重みを理解する】、【患者の残された貴重な時間に一緒にいることで患者のことがわかる】、【患者と時間を共有し、患者の希望を思い一緒に援助を考える】、【家族への援助が患者の援助につながる】の4つのテーマは、患者へ近づき、患者と時間を共有することで可能となる援助のあり方の学びであると考えられた。

緩和ケア実習での学びの構成要素を大町⁴⁾は、「患者および家族の情緒的絆」、「ホスピスに入院していることで得られる安心感」、「患者支援のためのチームワーク」、「基本的看護技術の有効性」、「生きることと死ぬこと」の5つのカテゴリーを明らかにしている。本研究でも、学生は患者および家族への援助が学びになったと語っていたが、その根底には『患者と時間を共有する』ことがあった。つまり『患者と時間を共有する』ことで得られた情報が援助を考えるときの基盤となり、援助を行いながら『時間を共有する』という段階をたどっている。そして学生はこのような援助の方法が緩和ケアには重要であることを学ん

でいた。

緩和ケア実習で学生は患者とのかかわりからさまざまなことを学んでいた。岸⁸⁾は「互いにわかりあうことは互いが自分だけの世界を歩み出て、一つの世界において互いが出会うことを意味する。互いの変容なしには人を知り理解することはありえない」としているが、本研究の学生も同様のことを語っていた。学生は患者および家族とのかかわりながら、死について考え、患者に関心を向けられるように変わることによって看護につながると、緩和ケア実習での学びを深めていったと考える。

2. 緩和ケア実習を振り返ることでの学生の学び

学生はグループインタビューを通して、緩和ケア実習を思い出し振り返ることで、【吟味しなかったことを振り返って考えることで自覚する】ことで学びを深めていた。グループインタビューは3年次の領域別看護学実習が全て終了した後に行なったため、緩和ケア実習の時期は様々であったが、実習が前半の学生も経験した出来事などをよく記憶していた。また他の学生の話に触発されて思い出し、それを語る場面も見られた。学生は「そのときはよくわからなかった」ことも、このグループインタビューで思い出し語ることで、自己のかかわりについて考えることができていた。

Schön⁹⁾は看護行為を思い起こし、分析、解釈することで、ある特定の状況で用いた知識を明らかにするための回顧的な吟味を「行為についてのリフレクション (reflection-on-action)」としている。本研究のグループインタビューが、学生にとっては、「行為についてのリフレクション」を行うきっかけになったと考える。経験からの学びを基盤とするリフレクションは、自己の成長と学びを得る最適な方法であり¹⁰⁾、グループインタビューにより学生は、緩和ケア実習での学びを深めることができたと考えられる。

また、糸島¹¹⁾は実習終了後に事例検討会を行うことで学生の課題を明確にし、学生間での学びの共有ができるとし、事例検討会で、臨地実習では考えることができなかったことを他の学生の発表を聞くことで、実施してきた看護を客観的に評価できたと報告している。本研究でも他の学生の語りを聴き振り返ることが、実習中の患者とのかかわりを分析し肯定すること

につながっていた。またこのような機会がなければ「記録にはあるがよく吟味されずに流れてしまう」ことも語っており、実習終了後になんらかの形で、実習を振り返ることが学びを深めることに必要であると考ええる。

3. 緩和ケア実習での学びを促す教育への示唆

緩和ケア実習での学びを促すためには、学生は患者の視点に立って援助を計画できるようになることが必要である。そのためには『患者の残された時間』に気付くことが重要であり、カンファレンスや事例検討を用いた教育的支援が必要であると考ええる。

緩和ケア実習の課題「死生観・看護観」のレポートは、実習前後に死生観・看護観について考える機会となる。学生は緩和ケア実習での患者との出会いによって、自分自身がどのように変化したかを振り返ることができ、生きること死ぬことの意味を考えるだけでなく、看護観を見つめることができると考える。

また学生が実習での学びを深めるためには、ある一定の時間において「行為についてのリフレクション」が行えるような機会を設定することが有効である。そのためには実習終了後のグループ討議やケースレポートなどを行い、振り返る機会を設けることが必要であると考ええる。

Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

本研究では緩和ケア実習における学生の学びについて、グループインタビュー法を用いてデータ収集を行っているため、学びの内容については明らかとなっているが、その学びの基となる学生自身が患者とのかかわりでどのようなことを経験し、それを学びと考えたかについての関係は明確になっていない。今後は学生の実習における経験が、どのように学びに関係しているかについて探求する必要があると考ええる。

【引用文献】

- 1) 厚生労働省：がん対策基本法、2009/10/18,
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan03/pdf/1-2.pdf>
- 2) 厚生労働省：がん対策基本推進計画,
2009/10/18,

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/06/dl/s0615-1a.pdf>

- 3) 内海文子、松本幸子、片穂野邦子、高比良祥子、吉田恵理子：ホスピス病棟見学実習における看護学生の学習内容－実習記録からの分析から－，長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要，Vol.7，p.45－52，2006.
- 4) 大町福美、新道由記子、竹元仁美、定村美紀子：看護学生のホスピス実習体験からの学びの生成，第38回日本看護学会論文集看護教育，p.386－388，2007.
- 5) 高橋圭子、荒木美和：ホスピス・緩和ケア病棟実習におけるターミナルケア実習での学生の学び－「看護の原点や本質をつかんだ」と総括された基となる日々の実習記録の分析－，愛知医科大学紀要，Vol.3，p.19－31，2004.
- 6) 久保木優佳、崎山栄子：受持ち患者の看取りを経験した学生の感情変化のプロセスとその要因，第38回日本看護学会論文集看護教育，p.36－38，2007.
- 7) 星野礼子、大森美津子、古川文子：終末期患者を受け持った学生のストレス・コーピング，香川県立保健医療大学紀要，Vol.1，p.63－73，2004.
- 8) 岸良範、佐藤俊一、平野かよ子：ケアへの出発－援助のなかで自分が見える－，医学書院，1994.
- 9) Schön, D.A／佐藤学、秋田喜代美訳：専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える，ゆみる出版，2001.
- 10) 田村由美、津田紀子：リフレクションとは何か－その基本的概念と看護・看護研究における意義－，看護研究，41(3)，p.171－181，2008.
- 11) 糸島陽子、鱈坂由紀、吉田広美、山田豊子：臨地実習終了後の事例検討会の効果，京都市立看護短期大学紀要，Vol.30，p.131－138，2006.